

小さいですが20年ほど前に日本のJAに似た販売組織Conasupoを作つて、農業技術の指導や生産物の買い上げなどで支援をしましたが、その後北米自由貿易機構(NAFTA)の展開の下で根付きました。北米から安い農産物が大量に入ってくるので個人の農業生産者には太刀打ちできない。「20世紀初めには、革命家サバタが農地の売買を禁止したこともあるのですが…」と残念そうであった。(編注・9月18日、日本とメキシコは2国間経済連携協定を締結した。農産品ではオレンジ果汁など5品目でメキシコからの輸入品の関税が低くなる)

女性の農業従事は多くはない

「母が小学校の先生でまわりで騒ぎ回る子どもたちを見て育つたせいか自分は教師にはなりたくなかったのですが、結局大学とはいえ教師をしています」。ガブリエラさんは表情豊かな、元気な女性であった。



アラウナ・イブラヒム・アティー・ムファドイさん(ヨルダン・ハシェミット王国)
Mr. Ibrahim Alawneh Atieh Mufadai

農業省家畜生産課 農業技術者

JICA帯広「循環型酪農システムコース」(2004年8月8日～10月27日)

国土の80%は砂漠

北海道より一回り広い国土は北から時計回りにシリア、イラク、サウジアラビアに囲まれ、ヨルダン川を挟んでイスラエルと国境を接する。

「国土の80%は砂や砂礫の砂漠です。酪農や農業のできるのはヨルダン川に沿った地域だけですが、ここは温暖でオリーブの木が茂り、いろいろな野菜や果物を作っています」とアラウナさん。しかし全体には食糧の自給率は低く、肉、家禽、農産物のほとんどを20カ国以上から輸入している。酪農については肉牛ではなく、乳牛が主である。「厳密な種は違うのですが、国では皆がホルスタインと呼んでいる種類が多く飼われています。70%がこのホルスタインです」。食肉需要の50%は満たしている。

「水利灌漑省」があります

ヨルダンが酪農を振興するうえでかかえる問題は、ひとつに、水不足がある。「年間雨量が100mm以下ですから、水も輸入します。ヨルダンには水利灌漑省があります。珍しいのではないでしょうか。それほど水は足りない

彼女の専門は園芸学でバイオテクノロジーなどを用いた研究も行っている。将来のメキシコ農業を支える人材の育成を担つており、「大学では19歳から22歳くらいの学生を指導していますが、女子学生も多く、週に一度は農村の現場に出るカリキュラムを組んでいます」と、農業の大切さを教える日々である。

豊かなのに寂しそうな日本人たち

JICAの研修終了にあたってのレポートに、日本人の寂しげな表情が気になると書いたそうだ。地下鉄車内に見かける若い女性たちはみんなお洒落できれいだけれど表情がなくてとても寂しげに見えたという。大通公園のベンチに座っているサラリーマンたちの暗い表情も気になった。「経済は発展したし、新旧の文化も花盛りだけれど、人の心が取り残されているような印象をもちました」。ガブリエラさんの大きな輝く瞳にはそう映ったようである。

国土の80%は砂漠

北海道より一回り広い国土は北から時計回りにシリア、イラク、サウジアラビアに囲まれ、ヨルダン川を挟んでイスラエルと国境を接する。

「国土の80%は砂や砂礫の砂漠です。酪農や農業のできるのはヨルダン川に沿った地域だけですが、ここは温暖でオリーブの木が茂り、いろいろな野菜や果物を作っています」とアラウナさん。しかし全体には食糧の自給率は低く、肉、家禽、農産物のほとんどを20カ国以上から輸入している。酪農については肉牛ではなく、乳牛が主である。「厳密な種は違うのですが、国では皆がホルスタインと呼んでいる種類が多く飼われています。70%がこのホルスタインです」。食肉需要の50%は満たしている。

「水利灌漑省」があります

ヨルダンが酪農を振興するうえでかかえる問題は、ひとつに、水不足がある。「年間雨量が100mm以下ですから、水も輸入します。ヨルダンには水利灌漑省があります。珍しいのではないでしょうか。それほど水は足りない

いのです」。水不足と砂漠のために農業も酪農も限られた範囲でしか行えず、人間にも動物にも食糧、飼料不足は否めず、酪農の振興は不可欠である。

「化学飼料を輸入する割合が多いので、当然ながら、土壤ー草地ー乳牛(畜産食品)ー糞尿(廃棄物)ー土壤という循環システムが途切れてしまいます。酪農民がこのサイクルを理解してくれるよう私たちは努力しなければなりません」となかなか苦労があるようだ。「今回の研修で学んだ家畜糞尿のメタン発酵による処理法や、視察したバイオガスプラントは素晴らしい、大変関心があります」と表情を引き締めていた。

古代遺跡の話はいずれかの号で

キリッとダークスーツでにこやかに握手を求めてきた静かな紳士振りに、他の研修員たちが冷やかしながら行き交うと、恥ずかしそうな様子であった。

歴史上多くの古代の遺跡や中、近代の古城、そして観光上の目玉とも言える死海があつて話には事欠かない。しかし、今回はヨルダンの酪農の現状の一端をお聞きするにとどめた。



シハム・サラー・アッバスさん

サヘル・アブド・エル・カレム・アッティアさん

オマイマ・アブデル・カーレム・アーメッドさん(以上3名、ダカリア県)

ジハン・モハメド・アブド・アル・ファタ・アルコットさん(ファイーム県)

オラ・モハメド・ウェラム・エブラヒムさん(ギザ県)

アミラ・エル・シャハト・アブド・エル・カーレックさん(ダミエッタ県)

Seham, Sahar, Omaima, Gehan, Ola, Amira の皆さん
各地の総合病院のICU ほか専門科の看護師長
あるいは看護主任。
(エジプト・アラブ共和国)「エジプト看護教育手法コース」
(2004年5月18日～8月2日)

(前列右側から時計回りに)シハムさん、サヘルさん、(後列へ)ジハンさん、オラさん、オマイマさん。イスラムについて語ってくれたシリアのイーマドさん

リクルアーン(編注・イスラム教信仰の基盤となる書。「コーラン」とも言われる)に詳しい人がいるから呼んできます」と2階へ呼びに行つた。

その詳しい人は、シリアから来ている研修員でイーマド・アルデン・サーウスさんといって、シリアの種子増殖センターの研究技師であった。ボカンと座っているインタビュアー(もはやインタビューにはなっていなかつたが)を脇に、6人で議論が続く。そしてその結論を話してくれた。難しい話であった。急に話の場に呼ばれて丁寧に説明してくれたことに礼を言うと、「教えを人に伝えることは私たちの義務ですから(いいんですよ)」という言葉がかえってきた。

インタビューは成立しなかつたが、彼女たちの楽しそうな、親しげな姿に接して垣根がひとつはずれた様な気がした。言葉がスラスラ出てこない人も目で気持ちを伝えてくれた。優しい人たちであった。

エジプトの看護師さんの研修コースはJICA札幌(当時の北海道国際センター札幌)開設の頃から毎年続いている、いつも見かける一団である。常にグループで行動している上に、体格の良い人が多くてなかなか近づけずにいた。今回顔見知りになつたのを機会に、一番積極的に話しかけてくれたひとりに直接、インタビューをお願いした。女性同士のよしみで、エジプトの看護師の仕事をじっくり聞くつもりであった。

が、当日、やはり彼女たち5人は、グループでやってきた。きれいな衣装でお洒落にきめて…。そこで、ひとりづつ名前を書いてもらったところ、フルネームの長いこと、長いこと。その意味を聞くうちにイスラム教の話になってしまった。内心、「まずい」と思った。何の用意も無かった。エジプトの一般的な資料しか持ち合わせていなかった。話が進み、5人の間で議論が始まった。ひとりの説明がおかしいということらしい。「私たちよ